

国内研修成果報告書

研修テーマ

「三重県答志島地域での子育てと社会的な親としての寝屋子制度」

研修期間：令和 8 月 11 日～8 月 13 日

研修場所：三重県鳥羽市答志島

<前書き>

今回私たちは、8 月 11 日から 13 日の 3 日間にかけて、三重県鳥羽市に位置する答志島を研修対象として訪れることとなった。その経緯としては、春学期に開講された「地域問題入門」という講義において学んだ「寝屋子制度」に強い関心を抱いたことが大きい。寝屋子制度とは、「中学校を卒業した男子数名（5～6 名）を「寝屋子親」と呼ばれる地域の世話役が預かり、寝屋子親の家の一室を借りて寝泊まりさせ、戸籍上のつながりのない者同士が、実の親子・兄弟のように絆を深める制度」⁽¹⁾のことを指す。この制度は、都会で暮らす私たちにとっては馴染みのない独自の仕組みであり、授業内では特に「寝屋子親」との関わりがいわゆる肉親的なオヤとは異なる“社会的オヤ”として位置づけられる点が強調されていた。また、その関係性が見返りを求めない「一般的互酬性」に基づいていることも学び、大きな印象を受けた。こうした独特な関係性を持つ寝屋子制度が、島の中でどのように広がり、人々にどのような影響を及ぼしているのかを自らの目で確かめ、肌で感じたいと考え、今回友人 3 人と共に研修を実施することを決めたのである。研修を行うにあたっては、「地域問題入門」を担当されている野田岳仁先生に相談を行い、さらに研修の拠点として宿泊する旅館の館長の方をご紹介いただいた。また、旅館の館長の方のご厚意により、私たちは研修期間中、旅館運営のお手伝いをさせていただく機会も得ることができた。このような経緯を経て、答志島での研修が実現する運びとなったのである。

<答志島について>

今回私たちが訪れた答志島は、鳥羽港の北東約 2.5 キロメートルに位置する、鳥羽市最大の島である。島内には答志、答志和具、桃取の 3 つの集落があり、令和 4 年 2 月末時点での人口は 1,861 人⁽²⁾とされている。答志島は、先に触れた「寝屋子制度」と呼ばれる独自の文化が今もなお残されている地域であり、その価値は高く評価され、市の無形民俗文化財にも指定されている。こうした点からも、答志島は地域社会の在り方や人々の結びつきを学ぶ上で重要な場であるといえる。今回の研修においては、この答志島のうち答志と和具の二つの地域を中心に、3 日間にわたって見学や活動を行った。島の暮らしや人々の営みを実際に目にすることで、講義で学んだ知識を現実の地域社会に重ね合わせながら理解を深めることを目的とした。

<活動内容>

1 日目は午前 9 時頃に品川を出発し、新幹線・特急・定期船を乗り継いでおよそ 5 時間をかけ、答志島へと向かった。答志島に渡るフェリーには一定数の乗客が乗っており、また到着した和具港には各旅館の送迎車が並んでいた。その光景から、答志島が観光業においても栄えている一面を持つことがうかがえた。私たちも他の観光客と共に送迎車に乗せていただ

き、今回の拠点となる旅館へと向かった。旅館に到着すると、館長の橋本様が温かく迎えてくださった。今回お世話になる宿は「答志島温泉 くつろぎの宿 美さき。」であり、ご家族で経営されている旅館である。到着後、早速お手伝いが始まり、1日目はタオルや歯ブラシといったアメニティの準備を行った。アメニティはすべて一つひとつ丁寧に袋詰めされており、その細やかな心遣いと日常的な取り組みに深い感銘を受けた。お手伝いを終えた後には少し時間があつたため、旅館の近くにある「はまよし」というパン屋を訪れた。閉店間際の時間であつたにもかかわらず、店内の商品はほとんど売り切れており、地元の人々に非常に人気のある店であることが分かった。その後、当初の予定を振り返った際、1日目は橋本様へのインタビューしか事前に決まっていなかったことに気づき、2日目以降の活動計画が未定であることに焦りを感じた。そこで、夕方のインタビューまでの時間を有効に使うため、島内を巡ることにした。島巡りでは海沿いを歩きながら港を眺め、さらに公民館や役場、郵便局、保育所などの生活に欠かせない施設を中心に見て回った。島という特性上、住民の生活に直結する施設がコンパクトにまとまっており、その様子は都市部とは異なる地域性をよく表していた。夕方には館長の橋本様へのインタビューを実施した。内容は旅館の運営、島の魅力、そして寝屋子制度についてである。橋本様ご自身も寝屋子を経験しており、かつては主に長男や島に残る者が中心となって寝屋子を行っていたという。橋本様は長男ではなかったが、旅館を継ぐ立場にあつたため寝屋子に参加したそうである。当時は寝屋子の仲間に煩わしさを感じることもあつたが、大人になってから酒を飲み交わしながら近況を報告し合う時間には楽しさを覚え、寝屋子の存在があつて良かったと感じる瞬間も多かったと語られた。また、高校から島を離れたことで、島での暮らしがどれほど恵まれていたかを実感したという。島では大きな事件が起きることはなく、常に誰かに見守られている安心感があつたそうだ。特に印象に残つたのは、「社会的オヤ」に関する橋本様の認識である。寝屋親に限らず、島では子どもは“島の宝”であり、大人たち全員で育て見守る存在であるという考えが根づいている。つまり、寝屋親だけではなく、島全体の大人たちが「社会的オヤ」として機能しているのである。このような関係性は都市部ではあまり見られず、極めて新鮮であり、強い印象を受けた。橋本様はお忙しい中、45分にわたり丁寧に話を聞かせてくださった。さらにインタビューの最後には、翌日に和具にある「ねやこや」という施設を訪れると良いという助言をいただいた。この施設は地域おこし協力隊の大学生が中心となって作られた施設となっており、研修をさせていただいた日にも大学生の方がそこを拠点にして活動に取り組まれているということを知ることができた。他にも実際に寝屋親をしている方のお話を伺う機会を得ることに對してもご助言をいただいた。夕食は橋本様に紹介していただいた「まるみつ寿司」でいただく予定であつたが、予約が埋まっており店内で食事をすることはできなかった。しかし、店主の方が私たちのために特別にテイクアウトを用意し、車で旅館まで届けてくださった。その心遣いから、島の住民の温かさを強く感じる事ができた。

2日目の朝は9時から旅館でのお手伝いから始まった。この日は主にベッドメイキングや部屋掃除、備品整備などを行い、旅館の客室を整えてお客様を迎える準備を進めた。一つひとつの作業は体力を要するものであり、旅館運営の大変さを身をもって実感した。作業の間には休憩時間が設けられ、旅館でパートとして働いている方々とお話する機会をいただいた。彼女たちは皆答志島の出身であり、そのうちの一人は桃取から通っていると話してくださった。その会話の中で寝屋子について尋ねたところ、口を揃えて「死ぬまで一緒である」という言葉が返ってきた。冠婚葬祭を互いに協力して行うこと、そして「朋輩」という

関係性についても教えていただいた。朋輩とは友達以上兄弟未満という感覚を示す言葉であり、島独特の人間関係を象徴する言葉であると感じた。午前の業務を終えた後、私たちは旅館近くの「喫茶店みはま」で昼食をとった。昼食後は、実際に寝屋親をされている方のお話を伺うため、役所へと向かった。職員の方にお話を伺ったところ、現在も寝屋親を務めている方がいるとのことで、二つの商店を紹介していただいた。その後マルキ商店を訪れたが、店の前で声をかけようとした際に偶然マルハ商店の息子さんが通りかかり、そのご縁でマルハ商店を訪問することになった。店主の方は最近まで寝屋親を務めており、当時の様子について詳しく語ってくださった。寝屋子は中学卒業後から結婚する 27～28 歳頃まで、毎晩寝屋親の家に通っていたそうであり、その負担の大きさも実感として伝わってきた。また、かつては 7 人程度の寝屋子がいたものの、現在では少子化の影響もあり 1～2 人に減少しているという。寝屋親の選定は挙手制ではなく、親同士が話し合い、誰に自分の子どもを任せるかを決めていたという話も伺うことができ、制度の実態をより深く理解する機会となった。その後、神社を訪れた後に和具にある「ねやこや」へと向かった。施設では国立大学の学生ボランティアの方が出迎えてくださった。彼らは「島プロジェクト」と呼ばれる活動に参加しており、夏の間は漁業の手伝いをしているという。「ねやこや」は子どもを対象とした海洋教育の拠点であり、同時に地域住民が集う場としても開放されている施設であった。私たちは施設の見学と案内を受けた上で、学生の副代表の方の協力により、漁師や市議会議員の方とお話しする機会を設けていただいた。漁師の方々はいずれも和具出身であり、かつて寝屋子を経験したことがあると語っていた。しかし、現在では和具における寝屋子の文化はすでに途絶えてしまっているという。それでも冠婚葬祭におけるつながりについては強調され、特に葬儀の際には寝屋子が共同で土葬を行っていたという話が印象的であった。また、「親元制度」という慣習についても伺うことができた。これは島外から嫁いできた女性に「親元」となる家を島の中に設けるという制度であり、地域の共同体意識の強さを表すものであった。夕方には再び「喫茶店みはま」で夕食を済ませ、その後は旅館に戻って夜のお手伝いを行った。夜はベッドメイキングや浴衣畳みなどを担当し、1 日の活動を終えた。

3 日目の朝は 8 時から旅館での手伝いが始まった。朝食の配膳や片付け、ベッドメイキング、アメニティの準備など、2 日間にわたる経験の積み重ねにより、私たちの手際も次第に良くなっていった。作業を終えた後には、旅館の方々へ感謝の挨拶を行い、私たちは旅館を後にした。その後、八幡神社を訪れ、昼食をマルト食堂で済ませたのち、再び「ねやこや」へと向かった。その日は島に長く住む九十歳の中川さんから直接お話を伺う機会を得た。中川さんも若い頃に寝屋子を経験しており、当時は島の男性のほとんどが寝屋子に参加していたと語ってくださった。お酒の席で喧嘩をした話や、実の親よりも寝屋親の方が怖かったという話など、当時の生活の様子を臨場感をもって教えてくださった。また、中川さんからは「朋輩」の存在や「親元制度」についての具体的なお話も聞くことができた。中川さん自身も親元を務めた経験があると語られ、制度が人々の生活に深く根付いていたことを実感することができた。こうした貴重な実体験を伺えたことは、私たちにとって非常に有意義な時間であった。その後、「ねやこや」を後にし、私たちは帰路についた。

<気づき>

寝屋子制度について多くの話を伺うことができたが、それ以外にも答志島に関して新たな気づきを得ることができた。まず、島プロジェクトに関わる学生の方から、島には診療所が

存在しないという問題を聞いた。以前までは唯一の診療所があったものの、現在は閉鎖されてしまい、島における医療体制には遅れが見られるとのことであった。また、島内を巡る中で気づいたのは、移動手段としてバイクの利用率が非常に高いという点である。島の住宅は密集しており、道幅が狭い箇所も多く見受けられる。そのため、自動車よりも小回りが利くバイクの方が便利であると考えられる。さらに、各住宅の軒先には「丸八」と呼ばれる紋様が見受けられた。これは八幡祭りの弓引き神事において、八幡神社の神紋である丸八を墨で書き、大漁や家内安全を祈願するものである。講義の映像資料の中でもこの紋様について触れられていたが、実際に現地で目にするすることで、この文化が今なお受け継がれていることを実感し、非常に驚きを覚えた。

<最後に>

今回の研修は、当初は旅館でのお手伝いと館長へのインタビューしか計画しておらず、スケジュールとしては行き当たりばったりの側面が大きかった。三日間という限られた時間の中で、事前準備やアポイントメントを十分に行わなかったことについては反省点として強く残っている。しかし一方で、計画を詰め込みすぎなかったからこそ、島の方々の声を直接聞きながら調査を進めることができたのも事実である。その結果として、「ねやこや」で出会った大学生ボランティアや漁師の方々、市議会議員の方など、当初予定していなかった多くの方々から生の声を聞くことができた。この偶然の出会いが、寝屋子制度や島の文化についてより深い理解へとつながったのは大きな収穫である。寝屋子制度については、旅館の従業員の方々や商店の店主、中川さんなど、異なる世代の方々から幅広い証言を得ることができた。その中で浮かび上がったのは、寝屋子が単なる「寝泊まりの習慣」ではなく、冠婚葬祭や「朋輩」といった人間関係、さらには「親元制度」にまで及ぶ、島全体のコミュニティを支える仕組みであったという点である。特に「朋輩」という友達以上兄弟未満の関係性は、島ならではの相互扶助の精神を体現していると感じられた。また、少子化や時代の変化により寝屋子の形は大きく変わりつつあるものの、そこで培われた価値観は今もなお島の文化に息づいていることを学ぶことができた。今回の研修を通じて、事前の準備不足という反省点と同時に、現地での出会いや直接の交流からしか得られない学びの大切さを強く実感した。最後に、答志島の皆様をはじめ、研修を支援して下さった野田岳仁先生、相談に乗っていただいた事務課の皆様、受け入れて下さった『答志島温泉 くつろぎの宿 美さき。』の皆様、「島プロジェクト」の大学生ボランティアの皆様、そして共に研修に臨んだ2人のメンバー、その他本研修に関わって下さったすべての方々にも心より感謝申し上げたい。

<参考資料>

(1)鳥羽市,答志島「寝屋子制度」(2025年8月14日取得)

https://www.city.toba.mie.jp/material/files/group/55/neyako_1.pdf

(2)鳥羽市,2022,答志島 / 鳥羽市ホームページ (2025年8月14日取得)

https://www.city.toba.mie.jp/soshiki/kikaku_keiei/gyomu/seisaku_keikaku/rito_shinko/2019.html